

主イエスがおられたユダヤでは、当時ユダヤ教が広まっておりました。ユダヤ教は旧約聖書を聖典とし、会堂が礼拝と説教の場所となっておりました。主イエスも伝道を開始された際ユダヤ教の会堂を使っておりましたがやがて反発に合っただけで会堂での教えが困難になり、主イエスの伝道の場所は野原やガリラヤ湖となっておりました。群集が大勢押し寄せてきた際には漁師に頼んで湖から船で少し沖へ出て、教えを伝えるのが常でした。本日の福音書の場面もそうしたところでありました。

さて、漁師たちが主イエスに会ったのはすでに日が上り、漁を行う時間ではありませんでした。漁師たちは夜通し働きましたがその日の獲物は何もなかったのです。主イエスがシモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をきなさい」と言われたのはそういう状況だったのです。主イエスは伝道活動が始めるまで大工をしておられました。漁に関してはこの世的に詳しくはありません。一方シモンはこの時の漁師仲間では最年長であり経験も豊かでした。大工だった主イエスが漁師として経験豊かなシモンにこう言ったのです。しかも時間は漁の時間をとくに過ぎていました。この場面はそういう時間の出来事だったのです。

それに対しシモン、このシモンは後に主イエスによってペトロと呼ばれることになる、十二弟子の中で最も重んじられた人ですが、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えます。ここにペトロの偉大さがあります。もしペトロが漁に対する自分の経験や自信からはこの答えは出てこなかったはずで、ペトロは学問はありませんでした。ごく普通のカファルナウムの人間だったのです。しかし謙遜な心を持っていたのが主イエスが招かれた大きなきっかけになったのでした。

漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになりました。そこで、もう一そうの舟にいる仲間に合図して、来て手を貸してくれるように頼み、彼らは来て、二そうの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになったということです。ペトロはこの現実の前に、主イエスが自分自身を遥かに超えた存在であることを知って恐ろしくなり、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言ったのでした。

主イエスはペトロを招かれ、ペトロは弟のアンデレ、仲間の兄弟ヤコブとヨハネと共に主イエスの最初の弟子となったのでした。本日の福音書の最後のところで、すべてを捨ててイエスに従ったとあるのは、彼らの驚きの大きさと謙

遜さ、彼らの心に芽生えた信仰を現しております。

この漁師四人の召命は、私たちの信仰生活に大きな語りかけをしております。主なる神はペトロだけでなく、すべての人に語りかけておられるのです。私たち自身が感じなかったとしても、気づかなかったとしても彼らが驚いたのと同じ業をこの世になしつづけておられるのです。私たち人間はまず、この世に働く主なる神の存在を感じ取れる者でなければなりません。そしてそれが人間の力ではない、この世の力でもないことを知り、自分自身より大きなものであることをよく理解して、信仰をもって従っていくことが勧められているのです。すべてを捨ててイエスに従った彼らのように、私たちも主なる神の前の自分の姿を正しく見て、主イエスに従っていきたいものであります。主は私たち一人一人に使命を与えておられます。